

沈思餘錄

第五年級 中川 胡風

一寸の暇を盗みて、余の常に感ずる所二三をぐり書きぬ。題して沈思餘錄と云ふ。文の拙あるは自ら期する所、此れを讀むと讀まざるは獨り讀者の撰擇に任せん。

今年の今日は再び得べからず

下宿屋の二階にくすぶり、運動するにもあらず、又勉強するにもあらず、只だ爲す所なく、何れかの隱居然として、無用の雜談閑話に時をうつせる、ぶらり生よ汝等は何の爲めに學校に通ひつゝあるか。汝等は言して云へるにあらずや「予は人ごあらん爲めあり、他輩の如く吸々として、試験の關門を通過するを欲せんや。只だ一時に大文士、大法律家、大政治家たらむのみ」と。汝の言は實に忘るるか。汝は狂するにあらずや。汝よろしく三省せよ。大文士、大法律家、大政治家たるに斯く手安く得べきか、誰か好みて多くの時日と多くの金錢を徒費し

〇〇氏のみならず諸氏も亦一考の價あらん。

勉強は坂に車

暑中休暇は間近くなりぬ。今此一堂に集ふ四百余の健兒は、父母兄弟の溫顔を拜すべく、故郷の雅景に對すべき樂みを待ちて歸省せん。されど休暇は實に永し、此れを如何にして過さんか。我等の疑問あり。

暑中休暇は休暇あり。此間、避暑よし、旅行も亦よし、されどぶらり生を習ふあかれ、只だ思へ「勉強は坂に車あることを」斯く書き來れば盡くる所なし即ち此處に筆を擱す。

汝の心霊を覺れ

第五年級 野村 佐一郎

世にありとあらゆる念情は信仰にあらざるよりは孰れか潔白あらざらん、信仰を、はあれて何か明瞭なるものあらん、信仰は實驗によさる。

それ科學は物當に然るべきを説く、物質不滅の原則

勞苦に耐へて勉勵するもあらんや。斯くの如きを爲す是れ其基礎を造らんが爲めのみ、基礎堅からずして大業を成さんとするは、恰も砂上に家屋を建つるが如く、此れ決して得べからざることあり。汝の如く人生の基礎たるべき中學時代に於て斯く安閑として爲すあからんには後時悔ゆる所あらん、其れ思へ「今年の今日は再び得べからざること。」

油 斷 大 敵

予の親しき友〇〇氏よ。君は實に予と竹馬の友あり共に金龜の麓の學び舎に入りてより四星霜を経ぬ、思ふに君は其初め我級にて一二の席に居給ひ、予と共に將來のことゝも打ち開けて談らひしことも有りき。君は大望を有するに有らずや、然るに此頃の起居を見るに夜べには雜談閑話に更くるを知らず、朝には間々遅刻し給ふとは聞きぬ。君知らずや油斷大敵あることを、油斷すれば千丈の堤も蟻穴より破るゝを。君は常に上席ありしも追ひくゝと下り給ひしにあらずや、願はくは〇〇氏幸に一考せられよ。

を説く能力不滅の理を實驗す、云ふ所皆誤らず然れども科學に反面あり、事實の不滅、信仰の能力あり事物の大小曲直を知るも何の科學者か信仰力の莫大なるを計算し得べき、科學の反面に心靈あり、誰か科學者にして物理倫理の外に嗜好あるを証明したるや、誰か人の嗜好を解釋し得たる、宇宙は無限あり時は永劫あり何の科學者か大極を計算したる、唯々信仰あり科學の反面に心靈あり、誰か詩趣を分解したる化學の外に心靈あり、誰か親愛の力を測定したる力學の外に心靈あり。科學は一切の事物をして無味ならしめ義務を教へ數價を論ず而して其れ以上に味出す、もし夫れ信仰は目的を離れて獨立し一切の事實に詩趣深からしむるに非ずや、何ぞ靈妙ある。人もし信仰を離れて身を地球の上に處かんか恰も粒子の大海にある如く其動くや物理の作用のみ其浮沈するや重力の作用のみ、人生の活劇は到底見るべからざるあり。然れども科學無用といはず、萬物の理を知ると同時に其裏に是を知る心靈ある力あるを知

れ、死期をかこつと同時に何故にかこつかを知れ
終始科學の反面に心靈あるを知れ。

あゝ世人は汝等もし電燈を見れば其明き所以を知つて
明きを知る所以を無視するを、電燈更に明らかられ
ば更にそれだけ深く。

信仰せよ信仰せよ信仰ある人は錠ある倉の如く其人
常に從容自若として君子の如く信仰なき人は、かひ
なき舟に似て疑懼相踵ぎ、さながら傘なき旅人の如
し。リヒテル曰く宇宙の靈を知らざる程不幸あるは
あしと、宜ある哉。

讀書餘焰

第四年級 外村 春萍

◎余曾て伊吹山に上りその奇草多きに驚けり、近日
ふと某書を見たるに曰く、信長南蠻寺の宣教師三
人を葡萄牙より迎へ、伊吹山にて方五十町の地を
與へければ宣教師等本國より奇草珍木を齎らし來
りて之を栽培すと、さればこそ俗諺に云はずや、

薛かぬ種は生へぬと。

◎明の朱元璋曾て書を懷良親王に贈りてその正朔を
奉せしめんとす、親王大に怒りて之に答勅を與へ
給ふ、その一節に曰く「開陛下選股肱之將起精英
之師來侵臣境水澤之地山海之州自有其備豈肯跪途
奉之乎」又曰く「相逢于賀蘭山前聊以博戲」と意
采軒昂眼中既に彼無きものゝ如し、されば藤田東
湖正氣の歌に「人雖亡英靈未嘗泯」と云へるも故
あるか。

◎之を以てかの足利義政の所謂「蕃籍銅錢仰之上國
……永樂年間多給銅錢」等を見るに實に嘔
吐三千丈たらずんばあらず。

◎世人細川頼之の義滿を輔佐したる功大なるを云ふ
然れども賢明ある義滿をして僭擬放縱、遂に國體
を辱かしむるが如き舉動に出てしめたるは罪決し
て默すべからざるなり。

◎天慶の亂に有名なる藤原秀郷は大忠臣ありしが、
余大に之を怪しむ、知とあれば將門をしてもし沈

隨感隨筆

第三年級 野間 莊三郎

勇大度の將からしめば、彼の従ふこと必然たれば
あり、然るに今や別格官幣社に列せられ唐澤山神
社に奉祀せらる、彼の靈魂果して差つるあきか。
◎獨眼龍伊達政宗、その臣友倉常長の羅馬に發する
に臨み吟して曰く「圖南鵬翼何時奮久持扶搖万里
風」と當時の人概ね如斯とかりき、蓋し邦人海外
志想の發達はこの時を以て最とす。

◎一步退いて方今に於ける邦人の状態を見よ、その
對外志想の振はざることを凍蠅病蟬の如き、海外に
在留するもの僅かに十二三万人に過ぎず、之を英
國の年々十七八万人移住するに比すれば、疲微も
亦甚だしと云ふべし、蹶起せよ、吾等の舞台は彈
丸黒子の小天地にあらざるなり。

◎支那歴史を讀みて宋に至り、對遼及び金との交渉
を聞かば、人皆その意氣地なきに驚かざるものか
からん、これ何が故に來りたるか、注意せよ、文
後に武備あり

◎吾々は智を研かん爲に、莫大なる學資金と貴重か
る光陰とを消費して校堂に於て科業を學びつゝある
なり。されば眞面目に、靜肅に學ばざるべからず。
かの授業時間中に談笑睡眠を貪る輩、それ慎まざる
べからず。

◎徒に勉強するを以て能事終るとあすものあり。顔
色蒼白、茫然として書籍と睨み合ひす。彼等は曰く、
吾人學生須く勉強せざるべからず、運動それ何する
ものぞ、知らずや、健全ある精神は健康ある身體に
宿る、といふ事を。彼等は遂に腦神經衰弱に終らん
のみ。

◎徒に運動するを以て能事終るとあすものあり。彼
等は曰く、命あつての物種、たゞひ勉強することも、
身體虛弱からばそれ何をかあさん、と星を戴いて運
動場に出で、星を戴いて家に歸る、顔色銅の如く、
四肢鉄の如し。然れども全く勉強を度外に置くを以

て、席順は益々下り、遂にはフェールの浮目に逢は
ん。

○勉強するは可あり、運動するも可あり、然れども
其中庸を守りて一方に偏する勿れ、傾けば倒るは豈
物體のみあらんや。宜しく大に勉強し又大に運動せ
よ、要は只度を守るにあり。さはれ勉強にもあらず
運動にもあらず、空談徒に時を過ごし、墮眠を貪る
は吾人之を取らず。

○諸君は煙草の害を知れるあるべし、其中に含有す
るニコチンは腦を刺撃して、非常ある害を人肺に與
ふるものなり。諸君は既に運動によりて健康を望み
ながら、之によりて健康を害す、必竟ゼロに終らん
のみ、其害を知りながら尙ほ之を喫せんとす、哀れ
むべきか。まして校則之を止め、國法之を禁ず、
校則國法を犯してまで、尙ほ口より之を棄てられざ
るか。

○あゝ意地きたかきか。人を譽むれば即ち曰くお
ごれと、此語の常に用ひらるゝに於ても、如何に學

奴隷あり、睡眠を貪るは睡眠の奴隷あり、運動にふ
けるは運動の奴隷あり、たゞそれ奴隷たるべからず。

金龜山に遊ぶ記

第一學年乙組 明知 順三

今日は幸に日曜日、天氣殊に晴朗あり、此に於て平
素の積鬱を散じ、併せて文の材料を探らんと欲し、
遂に金龜山に一遊を試みぬ、山は彦根の北端にあり、
井伊直政公の築造にかゝれり、四方堀を回らし、橋
を架し、以て頂上に上るべし、山頂は一望豁然眺望
宜し、孤城は幾樹者松の間に聳へ、葉櫻は緑を罩め、
夏草は青を競ふ時には涼風徐ろに吹き渡り、爽快云
はんかたかし、遙かに西北をかむれば、琵琶湖は茫々
として際涯なく、竹生多景の島々は、烟霞の中に隠
現し、沖には白帆眞帆の往きかうさま、筆紙の盡し
得るところにあらず、既にして多陽西山に傾き、東
方膽山は白雲の間に斜陽を帯び、琵琶の海は、朦朧
の間に暮れあむとす、即ち愛を割きて家に歸り、孤
燈の下此記を草す。

生の意地きたかきを察すべし。他人と飲食を共に
せんご欲せば其費用を分擔して可あり、兎角自己の
金錢を消費せずして美食せんと欲する賤しき心ある
かり、己れ錢なくば焼芋をかじつて甘んぜよ、何ぞ
人を煩はす要あらん、たゞ速に此の乞食根生を去れ。
○學生相會して先づ口に出づる所のものは何ぞや、
曰く教師の批評、曰く友人の惡口、曰く女學生の噂、
而して賞むる事は殆どなくして、只謗るのみ、惡口
するのみ。苟も罵るべきことあらば何ぞ面前に於て
之を罵らざる、若し罵るに足らざる事あれば陰にて
之を罵るを須ひざるあり。斯の如きは下婢井戸端會
議と何の異なる所がある。

所 感

第一學年 大井 洋

古人曰く、德行修れば隣國之に順ふと、苟も生を皇
國に享くるもの、豈此心掛なくして可あらんや。
それ國家は國民の團結體あり、されば國家の道德を
普及せんと欲せば、それが分子たる個人の道德より論
せざるべからず、然るに徒に國家の道德を期し、個
人の德行を顧みざるが如きは、花なくして實を結び、
雲なくして雨を欲するが如きあり、笑ふべき到りあ
らずや。予嘗て之を聞けり、我國民の私徳は暫く措
きその公德心の缺乏に到りては、蓋世界に其比を見
ざるべしと、これ實に我國四十年前、幕政の餘弊、
今猶脱去せざるによるべけれど、一は社會的觀念の
未だ國民の腦裡に注入せられざるに依るあるべし。
吾人はもとより禽獸に非ざれば、各良心を有せり、
而して世人の不幸にして貧窮に陥りて己が糊口にだ
に窮する者を見れば、誰か一掬同情の涙をがらん、宜
しく餘財を拂ひて以て救助すべきあり。而て上下を

憐れみ、下上を敬ふ、かくの如くにして、世は風波
 かく、知らず識らず、和樂の境に入るべきあり。
 今や我國の文明は駁々として進み、開明の利器一と
 して備はらざるかし。征清の役に於ては我國をして

東洋の最強國たらしめ、北清事件に於ては世界の強
 國と比肩するに到れり、されば我國民は益々一致團
 結して、我國光を世界に發揚せんことを期すべきあ
 り。



雜 報

◎日誌摘要

三月十六日 學年試驗開始
 三月廿一日 學年試驗終結。春季休業始まる
 三月三十日 卒業式執行
 四月三日 谷千城氏來校せらる。
 四月八日 始業式舉行。天皇陛下奉迎
 四月十日 入學式執行
 四月十七日 招魂社參拜
 五月一日 創立紀念式舉行
 五月十五日 安土山へ遠足ありたり
 五月十六日 演說討論會執行
 六月七日 本縣師範學校へ端艇撰手を派遣す
 六月十三日 發火演習舉行
 六月二十日 對第三佛敎中學校野球試合ありたり

◎舊雜誌部理事諸氏を送る

薄暗き編輯室の一隅に、額をあつめて、終日筆をと

り、呻吟して得る所は、四方の非難の聲、之我雜誌
 部の從來の様にありき、あゝ寂しき我が部よ、寂
 しき我が部よ、然り此の寂しき雜誌部をして、李桃
 櫻梅一時に開くかの如くせしものはたぞ、崇廣の光
 を輝せしものは誰ぞ、嗚呼諸氏の本部に盡悴せられ
 しことは、淡海の湖のそれよりも、伊吹の山のそれ
 よりも、おきく且つ大と云ふべけれ、而して諸氏今
 や任滿ちて、我が部を去らるゝに遇ふ、誠に我が部
 のため、崇廣のために、悲みても餘りありと云ふべ
 し、嗚呼諸氏よ、諸氏は遠く此土を去ると云ふとも、
 永く崇廣の名を忘れ給はで、惠の言の葉を賜らば、
 本部の幸あるのみならず誠に崇廣の幸、甚しと云ふ
 べし、諸氏願くば惠みを垂るゝに吝ある勿れ、

◎全校大茶話會 去年の大茶話會は、割合に

成功したから、今年こそはと、五年生(卒)の一部で
 早くより色々目論まれ、愈二月十日と云ふ其當日
 になると、色々の奔走に恰ど、狂の様であつた、そ
 れだから定めし御趣向の事があるであらうと、一方

からす人々は望を囑しておつた、扱て其日の開會は五時、先づ茶話會幹事賀來俊一君は、例の長廣舌で以て開會の辭、おまけに髯の御披露……こいつは一寸驚いた……それが終ると校長は進み出で、益々茶話會の發達せん事を祈るこの御話、亞で小川先生は「ホーマー」の人間原始説を、いとも可笑しく面白しうく述べられたり、之が終つた折りしも北の隅から小サる男で肩威からして出たものがある、之をん淵龍廣瀨その人だ、エヘン／＼咳拂ひいかめしく「林彈兵衛大狸退治牡丹山の段」十八番の講談だ、「扱ても林彈兵衛八幡の神の御告げにより、神變不思議の術を授り、ヤツとの掛聲と共に、敵が忽ちテンコロリンチン／＼と倒れる」のあたり輕妙又快活、誰やらが二代目桃林だと云つた、その御次ぎが令兄の廣瀨君、滔々數千言御得意の哲學論、由來君は本校第一流の論客で哲學者なんだ、僕はあやにく後に居つて充分に聞取るを得なんだのは遺憾至極だつた。モ／＼ヨイ時分たぞこの催促に漸くに菓子に分配され

た食ふ事／＼、又茶を飲む、其忙しい間に話をする、其音は合してガ／＼、當に茶話は酣ありだ。諸君と幹事が叫んだ、是から餘興に移ります、僕が一番に五年の中野君の作品、中々の上出来、入變つて二年の風俗畫し、地理の複習甚だ面白し、施米一寸(二年)は其次に演ぜられた、趣向と云ひ何と云ひ／＼申し分あからう、其次ぎが三年の活動寫眞、之は僕等は至極賛成だ、學生らしい處が最よい、亞いて五年級の餘興、視學官より起つて女學校の火災其滑稽には抱腹せざるを得ずで拍手大喝采であつた、それより門根君の勇壯ある劍舞に亞いで近藤君の悲壯ある吟詩や、高橋東郷兩君の對吟、彼一句此一句、音吐朗々玉を盤上に轉ばすが如く、或は高く或は低く、勇絶壯絶、人々は恰も恍惚として醉えるが如しであつた、かく興は愈々涌いて益々盡きずで恰も馬琴の歡樂郷の様で、誠に日頃の鬱を散して、近來にない面白い事であつた、折りしも城山の鐘は十一時を報じて、青みかゞつた月は城山の松の上に掛つて

梟の鳴音は、四隣の寂さを破つて哀れに聞えておるそこで幹事は起つて、閉會の旨を告げ、一同は君が代三唱本校萬歳を唱へて樂しく散會した。あー面白かつた！愉快だつた！諸君！願くば、次回の大會には今一層奮て、面白おかしく、愉快に遣呉れ給へ。

◎發火演習

夫れ治を喜び兵を傷むは、吾人の通性とする所あれども、哀しい哉、平和の裏面には、武力の伏在し居るを如何せむ、殊に將來、東洋の活舞臺に處して、之れが花役者たらんとする大和民族に於てをや、されば余輩青年たる士は、宜しく進んで軍事教育を受け、且つ退いて之を實際に研磨することを務むべきあり、故に我校亦茲に見る所ありて、毎年數回この舉あり、以て、之れが練習に供せらる、余輩、豈にこの好機を逸して可あらんや、二月十九日、夜來の寒風は圖らずも淡雪を齎し來りて、紛々として地上に積もること、寸余、玲瓏八面只璫を散じたるが如し、午前八時、愉快ある集合喇

叭の下に、校庭に集ふ者、約四百名、直ちに編成に従事せらる、終りて、各中隊長一場の告辭あり、曰くこれより醒井方面に向はんとす、言終るや否や早くも東軍の前進するを見る、續いて西軍も亦行進を始む。

部隊編成

西 軍

指令官 福永先生 一中隊(五甲、四甲、三甲、二甲、二甲、二丙、半員之に属す

東 軍

指令官 池田先生 一中隊(五乙、四乙、三乙、二乙、一乙、二丙半員之に属すかくて各中隊は道を切通しに取り、鳥居本を経て、米原に至り、數分間休憩の後、更に馬場樋口村を過ぎり、牛打村に達せり、行程三里余、途上只見る、枯林寒風に叫んで、時に吹雪を引き起すのみ、これより東軍は遠く去つて醒井に趣き、西軍は止りて各自携帯せし辨當を喫む。午後一時より、左の想定、

及び命令に據り、演習を実施す。

東西兩軍の想定

東西兩軍は中山道を醒ヶ井に向ひ前進中あり

西軍中隊樋口村に達せし時待たる情報

敵の歩兵斥候は一色村に現はる

西軍技隊命令 二月十九日午後一時於樋口村

- 一、敵の歩兵斥候は一色村に現はる、
- 二、中隊は醒ヶ井占領の目的を以て前進せんとす、
- 三、第一小隊は前衛とあり中山道を急進せしめし
- 四、殘余は本隊とあり第二小隊長之を引卒し前衛の後方約三百米突に在て跟隨すべし
- 五、予は前衛本隊の先頭に在り

東軍中隊一色村に達せし時待たる情報

敵の歩兵は樋口村に達し前進の模様あり

東軍技隊命令 二月十九日午後一時十分

於一色村

- 一、敵は樋口村に達し前進するものゝ如し
- 二、中隊は醒ヶ井占領の目的を以て前進を續行せん

とす

三、第一小隊は第一線とあり特に中山道左方山地を

警戒し急進すべし

四、殘余は第二線とあり中山道を前進す

五、余は第二線にあり

終り

於是乎、西軍は直ちに部署を定めて北進せり、折しも風物凄々として戎衣を翻し、暗潮方に激せんとして危機益々迫れり、かくて西軍は今や丹生川を渡らんとする一刹那、砲聲一發……と見れば、東軍の大部隊は、遙かに前方の山陰に沿ひて、續々肉薄せむとするものゝ如く、且つ其一技隊は既に鐵道線路に依り、激しく發砲せりされど西軍もさるものあり豈手を空しうして、その來襲に任せむや、直ちに丹生川の一橋梁を破壊し別に一隊を遣はして左方の小丘に據らしめ、更に殘余の大部隊を以て右方に展開し、火花を散らして、應戰す、されば砲聲は殷々として河水波を生じ、硝煙は漠々として空間に漲り、

この世ながらの修羅道に、やがて響ける吶喊の聲……哀れむべし、西軍は遂に退却せざるべからざる非運に會せり、依つて、直ちに第一小隊を後衛として、切通しに向て背進せり。

後衛戰

本隊已に退却せり、之れをして後顧の憂からしめ、且つ充分作戰計畫をあすべき猶豫を與へしむるは、後衛の任とする所あり、されば或は防ぎ、或は戦ひ、緩急よく時を圖りて頻りに轉戦せしが、遂に磨針峠の一嶮所を要して、陣地を占め、來れ討たむと待ち構へたり、されば戦捷の餘威に乘じたる東軍も容易には打ちもかゝらず、密に計畫を成すものゝ如し、かくて機は熟せしか、右手の山麓に沿ひ徐々として攻撃にかゝれり、一發又一發撼天動地の一戦場は又もや茲に演ぜられたり、されど西軍は戦鬪を主とするに非らざれば程よくあしらひて、さつと引くに、恰もよし紛々たる雪片は湖上吹き上げの嵐に誘はれて、空に舞ひ、地を蔽ひ、模糊として四邊を包めり

之れに力を得たる西軍は疾驅して切通しに至り、悲憤扼腕以て敵の來襲を待つ本隊に合せり。

切通の決戰

その爲体、隘塞せる山林に寄りて、戦線を鶴翼に張り死守して壘によれば容易く破るべくも非ず、されば東軍も頗る慎重の態度を取りたるが遂に右方の山腹に迂廻し、盛に發砲して極力之れを牽制し機に乗じて吶喊せり、これを視るや西軍の一技隊は急に側面より起り伏して之れを亂射す、かくてその大部隊は之れに躊躇ふ東軍は得たりやおうと切先鋭く逆撃せり、於是乎休戰喇叭は清く耳朶を徹して一聲は高く、一聲は低し。

かくて一同は列を整へて歸校すれば、やがて各指令官より左の講評ありたり終りて解散せしめらる。

講評

第一 天野河附近に於ける衝突は事計畫に違ひて満足に行ふ能はざりき。但しその際東軍の丹生川を渡りて突撃したる勇は賞すべし。

第二 後衛戦は完全に行はれ申分かし。

第三 近世の銃器は數千米に達してよくその効あり故に切通しの如き狹隘ある地に戦線を布くは不可あり、宜しく注意すべし。

因に本日發火演習講評後折よく來校せられたる昌谷本縣書記官の一場の挨拶ありたり。

◎劍柔大會 夫れ爲すあるは青年あるかる、刮目して天下の大勢を觀じ來れば弱肉強食當らず忽ちにして國亡び忽ちにして國大に其亡其大皆之れ競争の結果あり何を其甚しきや此代此時生を神州に受け身を青年の男子に處するもの豈慷慨憤起せずして可からむや

大に養ふべし氣力の堅と精神の剛とを、以て、武威を嚇々として天下に輝かし芙蓉峯頭大光明を照耀せしめんかあ、嗚呼有望の青年蝸牛然として豈當窓隅に呻吟すべけんや。

我が校風に劍柔の設あり以て武を鍊り氣を盛にす炎日寒天を問はず日としてかの縦横に振はす竹刀の聲

絶ゆるまもかし、

茲に三月一日其れが大會を擧ぐ此日たるや大空雲漲り晝猶晦しいざ滿胸の熱氣を蕩し以て一本の竹刀鉄腕を振はし雲を排せんとの勢其勢以て時正に十時劍撃の仕合始まりぬ、引續き午後柔道の仕合あり時に勝あり時に敗あり一勝一敗技術の巧妙精神の熱中人をして感慨憤憤涙を揮つて古の豪傑を胸裏に浮び來らしむ。

◎第十七學年試験 時の流水早きこと類あり、我等學を積む日一日復た已に此に一星霜を過ごし學年の一大試験は未來に進級の希望を充しつゝ目前に進迫し來りぬ愈此三月十七日を以て開始されぬ夫れ試験は好試金石來れ泰然自若以て平素の實力を示さんかあ。

◎寄宿舎の卒業生送別會 苦あれば樂あり、我五年級諸子が多年螢雪の苦を重ねられし結果やがて最後の難關を切り抜けて、中學卒業の榮と、前途の希望とを双手に握らるゝの日に會せむとす。

これ當然の事ありと雖も、數年の長き、疾病其他の障礙なく、無事に今日あるを得られしは、誠に天幸と云はざるを得ず。誰か之を賀する事に於て人後に落つるを願はむや。殊に我寄宿舎に起臥せられし諸君は、過去數年の間、或は寮長室長とあり、或は炊事員とありて、舍生の爲に身心を勞して、扶掖し誘導し、苦あれば互に之を慰め、樂あれば、之を他に分ちて、其親しかりし事、眞の兄弟も當らざる程ありき。俗諺子曰く、袖ふり合ふも他生の縁と、況やこは多年寢食を共にせし友に於てをや、畜類と雖も、之を畜ふと久しきに及べば、相別るゝは辛き習ひあるを、況してこは、苦樂を共にして兄弟も當らざりし間に於てをや、最早數日の後には、相離れざるべからずと聽きて、吾舍生七十餘名の面上、一點悲愁の影の潜める實に理なきに非ず。然れども、會者定離は我世の習ひ、且や多年兄事せし諸君が目出度門出に於て、女々しくも不詳の涙を流すは吾人が諸君に對する道にはあらじ。さればこゝに學年試

験の了るを期とし、我食堂に於て舍生一般五年級諸君と共に會食ををし、以て聊か送別の意を表せむとす。

かくて當日は、食堂に臨時大掃除を施し、正面には大花瓶に爛熳たる櫻花と、綠滴る松枝とを夾み、周圍には紺の幔幕を引廻らしたれば、粗末ある食堂も俄に目を驚かす許りとあれり。席次は聊平時の樣を變更して、西面して東方の食卓には、校長始め舍監を中央とし、五年級諸子は其左右に一列に着席せられ、而して南北二列の食卓には、全舍生隨意に着席せしむ。

時は維三月廿一日の正午を過ぐる十分の事にして、各自の席定まるを俟ちて、校長及主任舍監の挨拶あり、次で新寮長の舍生を代表したる送辭と、舊寮長の五年級を代表したる答辭とあり。其間滿堂の衆人咲きするものさへかく、いと靜肅に傾聽せり。

やがて其等の了るや、直に會食を始めたり。前刻より速に口にせられん事を望めるが如く、沸々と煮え

立ち居りし肉鍋中へは、忽ち衆著群下して、秋の野の薄の如く、霎時は一同息をも續がず掻き込みしが、漸く腹の満み初むるや、快談笑聲雜然として起れり。或は過日の試験の成績を豫想して云々するあり、或は明日よりの春季休暇には博覽會を見物せんと云ふものあれば、又一方には、互に健啖を誇れる等、和氣霽々、瑞氣洋洋とも云ふべき有様あり、或は酒あきは聊物足らずと云ふもの無きにしもあらざれど、畢竟之僻者の言、取るに足らず。酒は亂の基、唯かゝる時には、美穀精肉を食ひ、快々共に談じて以て、五年級諸子が、けふ迄の苦學の勞を慰すると同時に、吾舎生一同も亦、連日鬱積の氣を發散するを得ば又樂しからずや。

既にして時刻の移るに隨ひて、次第に退場し初めて、午后一時半過ぐる頃には最早堂中隻影なく、唯食器の卓上に狼籍たるを見るのみ。

◎第十五回卒業證書授與式 春の日麗らかに風暖かにして花笑ひ鳥歌ふの好季に當り、吾等は

端莊を以てせよ、且つ中學科程の卒業の卒業は社會に處する第一歩あれば決して是を以て誇るべからず

其言沉漫に流れず簡單に失せず深く卒業生諸君をしてよる所あらしめられたり了りて知事閣下の祝詞あり次で中村祐寛氏の本校生徒總代として祝辭を卒業生總代として澤村專太郎氏の答詞を朗讀せらるゝあり

それより各級々長優等生及精勤者並びに崇廣會各部理事等にそれぞれ賞品を授與せられ茲に再び「君が代」を三唱し奉り式を畢り例年の通り來賓諸氏及卒業生一同を雨天体操場に延き茶菓の饗應ありたりあはれ卒業生諸君よ、諸君が五星霜の規律ある勤勉は則ち因とありて今日の花を開き諸君今日の花は是亦基とありて他日良果を結ぶべく其間諸君の徑路は忍耐勤勉のみ、希はくは諸君今日の卒業を他日成功のしをりとし不退轉の向上心を以て其れぞれの深山にたどり入られん事を、

試験の關門をすぎ自然を友として累月研學の勞を慰するの時、三月三十日を卜しいとも壯嚴に第十五回卒業證書授與式を舉行せられぬ。當日春光和煦東山は紫霞變變として遠く棚引き自然の鼓樂は六合に響きて此の盛舉を祝するが如し、即ち五十有餘名の卒業生諸君は滿腔の抱負を以て講堂に集り來賓には鈴木本縣知事閣下を始めとして文武高等官地方紳士等數十名臨場せらるゝあり、一同席につくや先づ「君が代」を三唱し校長は勅語奉讀せられ續いて卒業證書を授與せらる、次で草場教頭の本學年間學事報告あり終るや茲に校長は再び登壇して普く卒業生諸君に對し向後の方針處世の心得等に就て懇篤なる注意を與へらる其要に曰く

諸子は今度中等教育を終へ其々の方針に向つて進むにあたり幾多の辛苦艱難は諸子の頭上に落下するや必せり此の時に當つて諸子は勤、儉、忍の三字を念頭におき一日も此の精神を忽かせにすべからず家を治むるには勤儉を以てし己を律するには

ここに諸君の姓名を記し聊さか祝意を表し併せて諸君の健全からん事を祈る

府縣郡市別	姓	名	年 齡
犬上郡	澤村	專太郎	一九〇三
阪田郡	伊夫	伎房太郎	一九〇三
甲賀郡	森地	淺太郎	一七二
犬上郡	小倉	雅吉	一七二〇
犬上郡	木村	二 郎	一八二
犬上郡	廣野	規矩太郎	一八〇三
東淺井郡	岩崎	秀 一	二〇〇四
伊香郡	高橋	茂十郎	一九二
犬上郡	孕石	泰 鎮	一七〇一
愛知郡	岡村	佐二郎	一八〇一
阪田郡	廣部	智 圓	一九二
伊香郡	野村	外 市	二二〇〇
犬上郡	門根	米次郎	一九一〇
犬上郡	柴田	善 作	一七〇九
犬上郡	山口	庸 民	一七〇三
高島郡	福井	祐次郎	一八〇五
犬上郡	野村	義 雄	一八〇一

阪田郡	杉本哲三	一八〇〇
犬上郡	土田一三	一八二
大分縣	廣崎浩一	一七二〇
阪田郡	宇治原孝造	一六二一
犬上郡	中嶋達也	一六〇八
犬上郡	森愛人	一六二一
犬上郡	吉田新七郎	一八〇四
蒲生郡	田中藤六郎	一九〇三
福井縣	添田諒三	二〇〇一
阪田郡	廣瀬文豪	二〇〇四
岐阜縣	桑原益方	一八〇三
京都府	河邊七太郎	一九〇二
阪田郡	那須開神	二〇〇三
犬上郡	種村義淵	一七〇八
兵庫縣	室谷喬三	二〇〇六
伊香郡	松井太四郎	一九〇七
犬上郡	今村養達	一七二〇
野洲郡	東郷安治郎	二〇〇七
東淺井郡	玉樹顯曜	二〇〇二
犬上郡	車戸留四郎	一八〇六
甲賀郡	大曾根行一	一六〇七

阪田郡	北條智賢	一九〇六
栗田郡	草川靜次郎	二〇〇五
犬上郡	成宮市太郎	二〇〇四
犬上郡	中川俊治	二〇〇八
神奈川縣	田邊隆吉	一九〇四
阪田郡	吉居留松	一九〇三
犬上郡	花木榮三	一八〇九
犬上郡	辻信	一九〇三
犬上郡	澁谷退三	二〇〇一
犬上郡	中野爲藏	一九〇〇
阪田郡	大久保章彦	一八〇九
栗太郡	周防正季	一七〇六
野洲郡	岡田彌橘	二〇〇〇
犬上郡	近藤兵一	一七〇六
犬上郡	若林留三郎	一八〇〇
蒲生郡	賀來俊一	一八〇八

◎京都帝國大學運動會 京都帝國大學運動會第五回陸上競技大會は、例年の如く四月三日を以て同校運動場に於て舉行せらる、我校亦其招に應じて高橋茂十郎氏を選手とし、室谷喬三氏を補欠とし

監督としては曾田先生並びに我が部より一名を派せらる、一行は舉行の前日京都に向へり、三日、測候所の天氣豫報にては「東南の風、曇り、但し少雨あり」とありしかば、如何あらんと氣遣ひつゝ床に就きしに、明くる日目醒めて起き出づれば、計らずも連日の曇天又は雨天に引き換へて今日はいと麗らかに晴れ渡りて心地よし、さて運動會は午前九時より開始せられ、午前はテニスの競技のみにて午後は諸種の競技を演ぜられたり、來賓には賀陽宮殿下、久邇宮殿下を始め奉り、大谷光瑩伯、大森京都府知事、高木警部長等内外の貴顯紳士、近府縣諸學校生徒、其他の觀客非常に夥しく雲集したり、豫報の如く午後零時三十分を報するや、直ちに第一回百米突競走を行ひ、長飛、二百米突競走、棒飛、四百米突競走、高飛と順を追うて進み、第七回はこのたび初めて設けられたる濟美旗競走(距離六百メートル)にして近畿文部省直轄學校の選手より成る、スタートの號砲に我れ劣らじと勇みに勇みて駆け出す六名の選手、

壯快、人をして覺えず快哉を叫ばしむ、第一着一分三十一秒にて第六高等學校(岡山)選手井上良二氏、第二着第三高等學校(京都)選手松田範房氏、尋で千鳥競走、學士競走あり、次は即ち第十回義勇旗競走(距離六百メートル)にして二府四縣十五校の中學校選手によりて成る、蓋し當日第一の偉觀あり、今や將に此の競走の行はれんとするや、金色燦然たる優勝旗は劉曉たる軍樂隊の奏樂と共に學生の手によりて春風に翻弄せられ、之を先頭として十五の選手は抽籤の順序によりて一列に整列し、場の中央を北方より南方に横ぎりて出發点に向ふ、時に拍手は四方に起り、歡呼の聲は奏樂に合す、雄風凜々たる各選手は重大ある責任を負うて、雄雄を茲に決せんと言ふ、彼等の心事果して如何ぞや、腕を扼するもの、手をさするもの、何れ屈強の士あらざるはあし、山あす觀衆の視線は彼等に注がれたり忽ち轟くスタートの號砲、物凄き計りに東山に反響するや、十五の健兒は一齊に砂塵を蹴りて駆け出せ

り、我が選手高橋氏は不幸にして十四番の籤に當りしかば、スタートに於て良き位置を占めざれば不得策ありと思ひけん、最初にスタートへビーを出し見る／＼衆を抜き褐色帽（大坂府立八尾中學校選手上田寛次氏）に次いで第二番目に駆けたり、勝敗いかに凝視すれば、或は先んじ或は後れ、一周にては未だ優劣を定むべからず、褐は終始第一の位置にありて毫も弛まず、一目散に駆ければ、第二の位置ある我が選手は容易に之を制する能はず、然るに決勝線は既に百米突以内の近きに迫れり、此の時褐は俄然最後のへビーを出して衆を抜きこと約十五米突、赤（大坂府立富田中學校選手長峰常次郎氏）淺黄（奈良縣立郡山中學校選手廣岡平八郎氏）の二人は必死のへビーを出して漸く我が選手を抜き越えたり、觀客の應援は非常に盛にして、褐！赤！淺黄！！と呼ばる聲は天地も崩れぬ計りあり、我等も亦藤！！藤！！（我が選手の被れる帽の色）と呼ばれども時既に遅く先づ褐は衆に擡んで第一にラインに入り赤

淺黄尋で入る、噫々何等の不幸を我事終に畢んぬ、又何を可言はん、また來ん年を待たんのみ、あゝ名譽ある義勇旗はやがて大坂府立八尾中學校に歸し終んぬ、噫、第十一回の第三高等學校對京都帝國大學の綱引はあか／＼に面白く觀者をして手に汗を握らしむ、今年も亦第三回の攻撃に於て終に三高の勝に歸す、第十二回は啓發旗競走にして一府二縣の師範學校選手より成る競走にして應援非常に盛なりしが終に名譽の月桂冠は又もや兵庫縣師範學校の手に歸しぬ、第十三回の障礙物競走亦あか／＼活潑にして面白し、第十四回の法醫科對理工科の千鳥競走は法醫科の勝に歸す、尋で毬抛、帝國大學職員競走、八百米突競走等あり、右にて競走を終り、これより賞品授與式あり、優勝者へは賀陽宮殿下御手づから夫々授賞遊ばされたり時に午後五時、

因にいふ、例年寄宿舎に於て茶話會を開かるゝ、例ありしかど今回は見合はせられたり

また茲に、選手、副選手二氏がよく責任を重んじて節制を守り、熱心に練習せられし勞を謝す、（浩額）

◎第十八學年始業式

八重霞深く棚引き、百花亂れ開く晩春の佳候、我四百の健兒は、學年試験の大關門も既に過ぎ、嬉しく父母の膝下に夢み、樂しく故郷の風物に接し、再び笈を負ふて金龜山下に集りぬ、月はこれ四月、日はこれ八日、第十八學年始業式は、生徒控所に於て舉行せられたり、先校長の訓示あり、其要に曰く、

諸子は既に一年の進級をあし、快く父母の溫顔に接し、爽快實に極りあけん、願ふに萬事の成功は、其始めの精神如何にあり、諸子は此貴重なる學年の初めに於て、大に元氣を養成するの心掛あかるべからず、語に謂はずや、活潑ある精神は、健全ある身體にやごると、然らば諸子は、元氣を養成する第一要素として、身體を強健あらしめざるべからず、苟も身體を強健あらしめむと欲せば、適當なる運動をあさるべからず、夫れ個人の元氣

は湊合して國家の元氣とある、然らば諸子が元氣は國家の元氣あり、決して過度の勉強を以て、能事終れりとあすこと勿れど、次で草場教頭より、教務上の注意あり、此に於て此式を終る。

◎入學式

四方の野山は霞靄鬱きて、萬花各々妍を競ひ、艶を爭ふ春は彌生の末つ方、年久しくも住馴れし故郷を後にして、我芹陽の地に負笈せし百余名の中、最初の難關を悉く通過して、こゝに四月十日午前九時雨天鉢操場に於て入學式に列席するの幸運を荷はれし九十餘名の新入生諸子と、在舊上級生との初對面式は、入學式と共に舉行せり。先づ校長より一場の訓辭あり。大要を略記すれば、曰く。

諸君は身軀は小さくとも、既に中學生とありし以上は、小學と異ありて、何事にも教師の厄介にある事能はず。總ての事皆自分自身にて之をあさるべからず云々。

了りて、新入生總代小林喜代治君先づ進みて、自己

等が無事に入學するを得し事を喜ぶ旨を述べ、故參諸君は爾來何かに就て、嚮導せられたしと挨拶し、次に故參生徒總代廣瀬淵龍君出で、懇ろに之に應へ、午前十時三十分目出度式を畢れり。

◎天皇陛下御通輦 筆に載するもいと畏きことながら、千代に八千代に限りなく、明らけく治まれる世を知らし召す、我、天皇陛下には、神戸ある艦觀式、及び大阪ある、第五回内國勸業博覽會へ、御臨場あらせられしにつき四月十日、當地御通輦あらせられしを以て、彦根停車場にて、恭しく送迎し奉りたり。

◎皇后陛下御通輦 皇后陛下には、四月十三日當地御通輦あられしに付、彦根停車場、フラットホームにて、謹んで送迎し奉りたり。

◎招魂社參拜 四月十七日は、招魂社祭典には、五年級は武裝、四年級以下は徒手にて、喇叭は曉々君が代を吹奏し、職員生徒一同恭く參拜せり。

◎本校創立紀念式 我が校は明治二十年開校

せられし以來、幾多の變遷を経て、校風益々舉り、今此に拾有六回の星霜を重ね、五月一日午前八時、講堂に於て創立紀念式を舉行せらる、當日の來賓には大東前代議士、藤居町長、山下女學校長、加藤前町長、幸島大尉、若山小學校長其他紳士卒業生等五拾餘名あり、職員生徒一同入場、續て校長の先導にて來賓の着席するや、一同君が代三唱し、次ぎに校長登壇して恭しく勅語を奉讀し了りて來賓に挨拶を述べ、且つ生徒に訓諭せられ君が代三唱して式全く終はり一同退場せり、

◎水上運動會 例年の如く本校創立紀念日五月一日を卜し、水上大運動會を大洞湖上に催さる、氣遣しきは頃日の天候、陰雲朦々、こもすれば雨とあらむとぞ、幸ひある哉、此の日朝來雲霽れ、鳩の湖づら波穩かに金龜城頭旭日眩し、會場に至れば、湖岸の小丘には幔幕を張りて、賞牌授與所、來賓席とご設けられ、無數の紅燈は翠綠滴らむとする老松の間に點綴せられ、用意甚だ周到あり、四百の健兒は

いでや日頃の鉄腕を示し呉れんと丘の上下に意氣昂

然たり、午前十時三十分、轟然二十一發の砲聲は、

湖上に鳴り渡り、佐和山に響きて開會を告ぐ、當日の競争回数は十有九、艇は去歲製造せし、竹生、沖、多景、の三艇、航程は廻航一千米突あり、

第一回、赤緑初めより優勢にて、白は終始振はず、廻航後、赤漸く勢を増し綠力漕せしも及はず、七分二十五秒を以て赤(多景)の勝利に歸す

第二回、白よく漕がれ悠々として七分二秒(多景)を以て決勝点に入る、

第三回、各互角の勢にて進みしも廻航に於て赤巧みに他艇を抜き、白緑の疾漕も其の効なく、勝利は七分十五秒(沖)を以て赤に歸す、

第四回、緑の勝、七分二十秒(沖)

第五回、(直行)先生と生徒との混合競漕にて諸先生の巧妙ある漕法には覺えず感歎の聲を發せしむ、三分二十秒(竹生)にて赤の勝、

第六回、皆よく漕がれ、勝は六分五十秒を以て綠(多

景)に歸す、

第七回、赤七分二十三秒(多景)にて勝ちを制す、

第八回、流石は錚々の間えある漕手達の競争とて皆よく漕がれたり、六分四十秒(多景)を以て綠、奮然赤を抜くこと數艇身を以て決勝点に入る、

第九回、模範競漕、三、四、五、年級撰手の混合を以て組織す、流石は撰手、オール揃へて波を蹴り進む見事さ、廻航迄は赤、白殆んど並行し、綠は之れより後る事數艇身、廻航後赤漸く勢を増し、白の之れを抜かんとて疾漕甚だ力めしも、二艇身余の差を以て勝利は赤に歸す、六分廿二秒(多景)

時に北風漸く吹き來り、一風は一風より激烈あらむとす、而も我が健兒益奮ひて風波を衝破りて漕ぐ、勇ましとも勇まし、

第十回、七分三十五秒(竹生)にて綠を抜くこと一艇身余を以て赤の勝、

第十一回、赤七分廿四秒(竹生)にて勝を制す、

第十二回、白雄勢にて舵手の蛇行的の御手際あるに

拘はらず、七分四十秒(多景)を以て勝利を得たり、第十三回、白、七分四十五秒(多景)にて第一着を占む、第十四回、七分二十八秒(多景)を以て緑の勝、第十五回、先生と生徒の混合競漕あり、赤(舵手草場先生)白(舵手平瀬先生)緑(舵手西村校長)の三艇にて、白緑互角の勢を以て進み、赤は稍後れたり、廻航の頃より緑漸く白を抜き、遂に七分二十五秒(多景)にて決勝点に入る、諸先生は甚だ巧みに漕がれ、殊に小出、福永、池田の諸先生は最もよく漕がれ、先生中の撰手とこそ見受けられたれ、第十七回、來賓競漕、鬚黒の紳士、或は卒業生などの混合競争にて勝は七分十六秒(竹生)を以て赤に歸す、

第十八回、慰め競漕、以上の競漕に於て第二着にして競漕分數の早きものありき、赤は七分三十秒(多景)にて第一着とある、第十九回、撰手競漕、當日最も壯觀ある大競漕は來りぬ、丘上も湖岸も色めき渡り、四百の會員は舟に

乗り旗打揮り、應援に援目なく、來賓さては一般の觀客に至る迄、勝負如何にと片唾を呑み、手に汗握りて眺めたり、

丘上緑樹の間に翻翻たる槍竿金繡の優勝旗は夕陽に映じて凜々しくも美はし、あゝ何れの級の手に握られんとはする、

已にして青(三年級)は岸に近き第三航路(艇多景)、白(四年級)は中央ある第二航路(竹生)、赤(五年級)は沖ある第一航路(沖)を取れり、

此の時風は益激しく、波は高く低く艇を弄することコルクの如く、左りへ左りへと押し流し艇の方向を過らしむ、舵手の苦心、漕手の困難少からざるべし、雖然、剛膽ある健兒は物の數ともせず、勇氣凜々、号砲一發と共に三艇は劣るを劣らじと此處を先途と鉄腕を揮ひ秘術を尽くして漕出せり、流石は撰りに撰りたるチャンピオンの競漕とて、或は急に或は緩に綽々としてオール亂れず、艇は怒濤を衝きてゴールに直進す、其の狀奔龍の如く、人をして覺え

ず快絶を叫ばしめ、氣揚り体震はしめき、

先づゴールに達せしは赤、綠殆んど同時、白之れに次ぐ、廻航以來赤猛烈ある急漕を以て他艇を壓し進み行くにぞ、綠、白も何條劣るべきと急激ある漕調を以て、之れを抜かんと力めしも甲斐なく、赤は悠然として緑を抜くこと數艇身にして六分廿秒を以て決勝点に入れり、

如斯にして勝利は第五年級に歸し、堵の如き觀衆の萬歳聲裡に金色燦然たる優勝旗は赤の撰手北川君の手に授けられぬ、

時に夕陽西山に落ちんとして餘光金龜城頭を射る頃ありき、

今此の名譽を負ひし第五年級撰手諸君を擧ぐれば

撰手 北川九一郎 整調 藤谷 三磨
五番 淺見 一雄 四番 中川 作平
三番 竹内 賢吉 二番 山田宇三郎
軸手 久能 幹

第五年級は去歲競漕會に於て大捷を得て、此の名譽

ある優勝旗を授かり、今爰に再び名譽を博す、あゝ至大の榮ある哉、

雖然、各級撰手よ、二十有一の健兒よ、校内に於ての、區々たる競漕に於て、勝ちたりとて誇稱する勿れ、負けたりとて沮喪する勿れ、共に健兒は益其の鐵腕を練磨して、來八月三保崎の大競漕會に於て其の技倆を表し中原の鹿を得て我校の名を擧げよ、

因云競漕會後撰手慰勞會は從來各級個々に或は雨天体操場に於て、或は寺院を借りて催しゝが、

今回は五年級有志者の尽力により各級一團とありて雨天体操場に於て開かれたり、美ある哉此の舉、互に勝敗を眼中に置かず、共に楽しく食ひ、快く談ず、各自餘興を尽くして撰手の勞を慰す、あゝ男らしき哉、吾人は永久に此の良風の存するを祈るや切あり、

◎級長任命 第十八學年各級々長は四月十七日左の通り任命せられたり。

第五年級甲組級長 竹内 謙 吉

同	副級長	久野 幹
第五年級乙組級長	藤谷 三 磨	
同	副級長	廣瀬 淵 龍
第四年級甲組級長	外村 孝 造	
同	副級長	花房 季 磨
第四年級乙組級長	村上 義 一	
同	副級長	西川 修 造
第三年級甲組級長	谷川 寅 吉	
同	副級長	北川 久 一
第三年級乙組級長	野間 莊 三 郎	
同	副級長	若森 梅 三 郎
第三年級丙組級長	木村 勘 治	
同	副級長	芝原 岩 治 郎
第二年級甲組級長	高橋 源 治 郎	
同	副級長	馬場 信 吉
第二年級乙組級長	北野 憲 三	
同	副級長	岩根 兵 吉
第一年級甲組級長	小林 喜 與 治	

同	副級長	岡田 丈五 郎
第一年級乙組級長	井口 哲 宗	
同	副級長	住井 龜 太 郎
◎級監督屬托	第十八學年級監督左の諸師に屬托せられたり。	
第五年級甲組	小川 廉 三 郎	
第五年級乙組	伊藤 榮 三 郎	
第四年級甲組	平瀬 作 五 郎	
第四年級乙組	堀 房 次 郎	
第三年級甲組	平川 常 太 郎	
第三年級乙組	松浦 益 雄	
第三年級丙組	北古 賀 力 餅	
第二年級甲組	佐藤 春 吉	
第二年級乙組	阪 廣	
第一年級甲組	桶口 逢 三	
第一年級乙組	田中 哲 之 助	

◎兩陛下奉送迎 我が允文允武ある 大元帥陛下には今春大阪に於て舉行せられたる觀艦式並に

第五回内國博覽會に臨御幸遊ばされしが兼て大阪に御滞在中の 皇后陛下御同車にて五月十日御還幸遊さる我校職員生徒一同は午前十一時二十六分當彦根驛停車場東側プラットホームに整列しいと謹みて奉迎せり

◎終日遠足 余春已に逝きて朱明こゝに至る、滿野の新緑漸く濃く、雲雀空に歌ひて雅曲を奏し菜園の胡蝶は天女の演舞とも怪まれ、何れか佳趣あらざるはあし。

時や維五月十五日俄然終日遠足の命は下りぬ、東空未だ明けやらぬ午前七時、四百の健兒は正装の下に中飯を携帯し、三々五々運動場に集りぬ、やがて躰操教監の指揮の下に隊伍を整へ、整々堂々彦根驛を後にし、道を朝鮮人街道にこり、堀村、稻技の村々にて小憩の後十一時二十分能登川港に着きぬ、こゝに一同中食を終り再び隊伍を整へ漸く午後一時安土山麓に着きぬ。

山たるさまで高きにあらず、又險しきにあらざるも

地東西の要衝を占め、然も西方一帯は琵琶の入江を控へ當時の要害たりしこと追想すべし、一同路側の徑路を辿り、青苔滑かある殘礎石垣の間、雜草鬱茂せる間を攀づること數町にして右府の墓前に達す、疆域方數間、中央に石をたゞみ礎石の横るを見る、苦むしたる一片の斷碑よく人をして、昔を思ふの情に堪へざらしむ、あたり凄然として、たゞ鳥雀の悲しむあるのみ、一同覺えず歎歎して双涙を宿しぬ、西を臨めば天主樓の跡尙依然として存在するを見る一同やがて道を右方にこり、崎嶇たる徑路を下ること、二町あらずして總見寺に出づ、此寺は右府の草創にかゝり、正仲禪師の開基ありと傳ふ、佛堂に信長の像及信忠の畫像を安置す、こゝに再び隊伍を整へ山を下りて、須田村に出で、地嶽越の嶮を侵して五箇莊村を過ぎ三時漸く小幡停車場に着す、やがて三時四分近江鐵道上り列車に投じ、四時五分無事歸校せり。

◎演説討論大會 柳櫻をこき交せし春の錦は

昨夜の夢と打ち破れ、今は薄縁の若葉にすゝ風戦ぐ夏の初め、讀書の好時節、運動の好時機とありにけり、是に於て我が演説討論部は各藏著する思想を述ぶるべく、四百の會員の意を充たさむとて五月十六日午後二時より本校講堂に於て大會を催しぬ、定刻に至れば蘇秦張儀の辯を振ひ、滿場をして仰天せしめんとこの意氣込にて會場に入るもの無慮四百名實に近年未曾有の出席者ありき、

先づ平川部長登壇して之れより本學年春季演説討論大會を開催せんとす、依りて標示の如く順次に特有の雄辯を振はれんことをぞ、

已にして拍手の裡に壇上に表れたる長軀有鬚の老士

第一席 運動に就て 平瀬 先生

悠々として動運專修者の勢あきを慨歎し、運動の必要あることを説き而して一運動に偏すべからざることを論ぜらる、聴衆は黙々として皆運動を力めむとする色あり、

第二席 膽 力 西村 正一

吾人が希望は大ならざるべからず、而して希望あると共に一大決心と一大勇氣なかるべからず、實行するの決心勇氣なくんば希望なきに如かず、今日の學生は如何にも希望は大なり、或は大臣たらむ、或は大將たらむと、而して一大決心と一大勇氣を以て果して其の行路難を排斥せむとするや、余は其の決心も勇氣もなしと信ず、如何となれば彼等は杭よりは牛肉店雜貨店に親密なるにあらずや、嗚呼如斯んば第二十世紀の日本を如何にせむとする乎、遠大の希望を持して金龜城下に學びつゝある諸子よ、宜しく三省して大なる決心と勇氣を以て希望を成就せしめよと、雄辯滔々として氣焔萬丈、

第六席 故 郷 四年 伊藤 顯山

吾人が親しき兩親、睦じき兄弟姉妹に別れ、樂しき山川草木を後にして他郷の客となり居るは希望の存せられずなり、予や書窓の下にありて時鳥の聲を聞き、さやけき月を眺むるにつけ、戀郷の念勃々として起り斷腸の思に堪へざるなり、あゝ余は男子なり、必ず希望を完成して錦衣歸郷し以て此の現在の思を充分に慰めむと、辯舌に柳揚なく聲の小なるを憶みとす、

第七席 花は光明 五年 中村 祐寛

諸君よ天地間に生物界の第一位を占むる物は何ぞ、云はずもがな、吾人萬物の靈長たる人類也、此の人類は希望あるが爲めに生存するなり、而して其の希望を遂げんには幾多の奔流あり峨々たる山岳あり、此の關門を無事に通過せしものは希望の彼岸に於て爛熳たる花と燦然たる光明とを獲得せむ、是れを獲得せむには幾多の歲月と辛苦とを嘗めざるべからず、古來事を成し業を完くして豪傑と呼ばれ英雄と稱せらるるもの皆此の幾多の歲月と幾多の辛苦を経て決して

膽力の必要を説き、牛若丸、日蓮を引証す、進んで其養成法を説く、曰く登山可なり、劍道柔道も可なり、水泳の如き最も可なり、而して水泳は膽力を修養するに必要なものにあらず、我國の如き四邊海に濱する海國にあつては生存上大に肝要なり、而して予や膽力大なるに非らず唯諸君と共に大に修養せむと欲するのみと、

第三席 公 德 五年 西村 會長

德は心に藏するものあり、而して公、私の別あり、公德とは公衆に對し個人々々のあす行爲あり、故に公德は世上より大に賞讃され、非難さる、他人に迷惑をかけ害を與ふるは公德の非難すべきものあり、團體中に一人の公德無視者あれば其の團體の汚名をかき、我校中一生徒の公德無視するあれば校の汚名をかす、諸子よく注意して校名を汚す勿れと、衆黙々たり、

第四 席 花 五年 清水 寛一

泰然としてコップを傾け意氣昂然、梅すみれ杜若各々特色あり其の爲めに人に賞せらるなりと説き出し、人も亦特色ありて特有の實を結ばざる可からず、而して人は自信大に肝要なり、それ自信は頑固と誤り易しく心得べきなりと間には快語を交へ聴衆をして抱腹絶倒せしむ、雖然吾人は今し眞面目に演ぜられむとを欲するなり、

第五席 希望と實行 三年 三上 哲巖

短歲月に徒手逸樂にして其の名をなさるなり、今や二十世紀の初舞臺に於て東洋の形勢日に月に暗澹となれり、此の際に當れる吾人青年は大に奮發興起して爛熳たる花を手折り燦然たる光明に浴せべきなりと、説く所要を得たり、

第六席 所 感 卒業生 藤田 義亮

開口餘るに、曰く本校は近頃大に學則も完成し、服裝甚だ整頓し一人の反則者を見ず、又禮義も正しく實に感服の至りなり、さて演説の必要は吾輩の言をまたずして明かであるが世の文明に益進み、社會が愈々複雑になるに隨ひて辯論の必要もそれだけ大になる、故に諸君も練習の上に練習して後日社會に雄飛する時の資とすべしと例を東京の學生に引いて論じ、遂に一轉して英雄豪傑は尊敬すべきものにあらず、尊敬すべきものにあらざる、尊敬すべきは偉人なりと論じ或は孟軻の語、南州の言を引き大に述べられたり其の氣焔到底當るべからず、

第九席 國語朗讀 樋口 先生

冒頭大聲諸君も多くの演説で御退屈でありましよー、私から一寸あつさりと御茶漬を差し上げましよー、私の讀みますのは「忠孝ある水兵」と云ふ文章であります、明治二十七八年戰役に於ける某軍艦の一水兵の其の母の書面を讀む事であります、この前置口上に讀まれたり、聲朗かに場肅然たり、四百の健兒は其の悲哀の感胸に溢れ、絶えて頭を上ぐるものかし、

第十席 親子 三年 湯本 辰雄

子島の親島に對する孝道を知らざるを説き、萬物の靈長たる人間に於てもこれありと論及、簡にして明、

第十一席 所 感 北古賀先生

中學時代に於て數學を研究するは答を得るを目的とするにあらずして腦髓を練磨して緻密ならしむるにあり而して尠からざる腦力を要するものあるが故に相當の運動を爲して、血液を増し身體を健やかならしめざる可からず故に運動も必要あり、然れども要は勉學にあり、諸君よ、能く此の本末終始を熟考せよ、快敏ある精神は健在ある身體に宿る大に運動せざる可からずと云ひて運動にのみ熱中せば後日必ず大に悔ゆる時あらむと論せらる、衆沈黙して一語を發せず

第十二席 國語朗讀 藤谷 三磨

五年太平記の「節」大塔宮野落の事を朗讀せり

第十三席 水泳に就て 伊藤 先生

我國の如き極小の海國にありては大に水泳の必要を見るあり、學術に、商業に深く脩め大に致さむと欲

せば渡航して歐洲あり米國ありに行かざるべからず而かも益世の文明に趣き海運業盛からんとするに於ておや、難船の際生命を全うし得るは水泳の力あり、水泳は海國人の必ず習得すべき藝あり、余は少しく水戸流を習へり其の方法を説かんとて、甚だ詳細に説明せられたり、聴衆のあるものは今夏先生の教授を垂れ給はむことを切望すと叫べり、

尙此の外に出題の辨士數名ありしも時間の都合により其の高論雄辯を聴く能はざりしは遺憾ありき、休憩十分にして再び入場し論戰を始めらる、

討論題は「商工業孰れを重んずべきや」にて平川部長拍手に迎へられて壇上に立ちて議長席に就き、舌戰の宣告を下せり、暫時衆默然たり、既に開戰の宣告は下りしは何條默する事やあると華房君、雄辨滔々として商業大に重んずべしと論せしを導火線として商業を重すべしと主張する面々には西村、川瀬、久能、脇、の諸君、工業を重んぜざる可からずと論する人々には南部、中村、山田、北川、清水、

三上の諸君にて何れもよく論じよく駁し議論沸騰底止する所を知らず、部長は決を衆に問ふに工業を可とするもの過半を占む、折りしも席隅大聲叱呼して議長に向つて曰く本題は討論題たる價值なきを以て乞ふ撤回せよと、然れども勝者の歡聲の爲めに打ち消され且つ暮色模糊として湖上より薄まり、四顧暗然たり、是に於て部長は局を結ぶ旨を告げ「君が代」を三唱して散會す、時に城山の晚鐘六点を報す

◎大日方學校醫逝く 平生其の溫容を慕ひ

其の德に懷き生等の敬愛せる本校々醫大日方隆治先生は四十有三才を一期として溘然逝去せられたり、顧みれば八年の昔、彦根病院長として赴任せられ爾來熱心職に當り院務大に擧がり遂に其の新築を見るに至る、其の患者に對する懇切皆其の德を敬仰す、又本校の爲め大に盡悴せられ生等其の恩惠を蒙るを得しが、頃來不慮の事より痛く健康を害はれ藥石効なく、五月雨をば降り寂しさいや増す、さ月晦日の夕遂に此の世を去り給ふ、噫、先生猶春秋に富み、

金龜城下の衛生醫療、先生の手腕を待つもの頗る多かりしに、忽焉として不歸の客となり給ふ、生者必滅は世の習ひとは聞きつれ、眞に惋惜の至りに堪えず、茲に謹而哀悼の誠意を表す

◎滋賀縣々立師範學校短艇競漕會

頃しも水月の初め天は漸く曇り勝ちにて細雨煙の如く至る時本校無雙の漕手は常に水波を蹴つて琵琶に快艇を浮べ「見よや湖東の快男子が敏腕を」と専ら好機のを待ちしが天は是をや嘉しけん茲に六月七日日本縣師範學校は短艇競漕會を催し本校の漕手を迎へられたり其健兒七名曰く

撰手北川九一郎 整調山田宇三郎 五番村上義一
四番中川作平 三番竹内賢吉 二番北川久一
一番前川利七

敵は關西に評判高き滋賀二中、京都一中の荒武者連あるが本校七名の撰手は何れも勇み勇んで平生の手あみ見せてくれんと今日限りに漕ぎければ枯れたる木葉の潮の流に従ふ如く航路千米瞬時にして漕ぎつ

くし天晴れ未曾有の大勝利を得たり撰手は拍手の中に迎へられ榮冠を戴いて即日歸校の途につきぬ聊か諸君積日習諫の功に酬ゆるに足るが如しといへ共俗諺にも云はずや勝て兜の緒をしめよと吾人は漕手諸君の奮勵自重せられむことを望む。

◎夏季野球大會

夏草の茂みにつれて我運動場も漸く草生ひ繁り「吾人をしてあはれ陸上運動は忘れられたるが四百の健兒は野球の樂みを知らざるか」と嘆せしめむこそし時忽ち檄あり野球大會の開催を報じぬ。ダイナマイトの爆烈せし如く機會を待てる勇士は一時に來應し、忽運動場裏にアウト、ストライキの聲響は起りぬ。競技者はいづれも鐵腕を試みんとて意氣軒昂して晴の勝負を爭ひ前後十回の勇壯あるマツチあり。(六月七日)

其内撰手競争は極めて勇壯にして最も觀客の目をひけり今諸氏の姓名を記して其熱誠を彰かにせん

村尻殿玖野見橋田田 村山村居橋川野本房
木川炊珠淺早大山谷 木横木中大西上寺華

霜の枯草に布けるが如く三年以下武装せざるものは腕肘硬くして氣骨面にあらはれ殺氣勃然として止む所を知らず已にして全員は左の如く部署せられぬ。

防禦軍(南軍) 指揮官 池田 先生
中隊長 中川作 平
第一小隊(四甲)長 久野 幹
第二小隊(三甲)長 竹内賢 吉
第三小隊(二甲)長 白井敬治郎
攻撃軍(北軍) 指揮官 福永先生
中隊長 廣瀬淵 龍

第一小隊(四乙)長 珠玖退 三
第二小隊(三乙丙)長 仁木次郎
第三小隊(二乙)長 北川九一郎

かくて南軍は七時半に我攻撃軍は八時に出發せり抑も本日の戦は昨日の激戦に北軍痛く打ち負け彦根に退却せるに長濱方面より一小隊の應援隊を得たれば昨日の恥を今日犬上、愛知の平原に雪き天晴れ武勇の勝利を得ばやと思ひ定めて何れも勇みに勇み殊に

P C S S I B 2 B 3 B R F C F L F
其得点の割合4に對する3ありき。

◎夏季野外演習

鬱々たる翠綠滴らんとする初夏の候細雨煙の如く水畔は鳴蛙聞々として鼓をうつが如し人はハンモックを慕ふて午睡を貪り天地峻烈の氣は茲に殆んど絶滅し蕩然として墮落の外又かすかきに至らむとす。この時に當つて百雷山谷を動かし千電天に閃き吾人をして怠墮より免れしむるの壯舉は遂に考ふべからざるか天又我に是の術を教へざるか否々この術あり大にあり發火演習即ち是あり四百の快男子は業に之を知り之を待つこと千秋もたゞならずと云へ共遂に其期を得ず將に不平の内に終らむとす。

命令下る「六月十三日終日野外演習を行ふと我等の喜悅如何ぞや我等の踴躍それ幾何ぞや。

聽て十三日にあれば曉星稀に朝霧野に滿ち東天漸く白からんとする時四百の壯丁は既に校庭に集りぬ、四年五年武装せるものは劍戟日に映じて輝き宛然曉

中隊長は本校無雙の驍將と聞えければ誰れか其勝利を期せざらむ中隊長は藤林分隊長に命じ斥候を出しツ川右岸を東に向つて搜索せしめぬ、されど如何にせむ黒軍(北軍)が旌旗の翻る所飛鳥も翔る事を得ず大軍の近く所山谷も是が爲に動き野狐禽鳥の影だにもかし銃聲二三轟きの斥候報して曰く「地藏村の北端田圃の中に敵兵現はる」と前兵長に命じて之れを撃退せしむ敵は昨日大勝の利を失はじとよく防ぎ戦ひ大堀山に據りて芹川の南岸を擁し我軍を要撃せり巉岩峙ち絶障削成する翠巒の上敵は天嶮に據りて陣を布く我軍之れ攻撃すれども容易にぬく能はず徒らに死傷多く芹水將に色ざらむとすされども敵は猛烈なる我攻撃に堪へ得ず山を下りて退却しければ我兵勇を鼓して之れを追撃せり時に八時四十五分朝陽高く光輝を我軍に副ふ滿目草木青く路上塵埃の内唯だ腥血の点々たるを見のみ中仙道は老松兩側を綴りて數十町の遠方遙に敵の白帽を見る又俄に肉薄する能はず斥候は絶えず視線を道路の兩側の間に張りて敵

の影見洩ざしとて進む途中時に發砲すること一發又一發以て敵の有無を探る伏兵あらぬ群鴉は爲めに鳴いて天に散亂し士卒は爲めに士氣を鼓す已にして敵は高宮橋をやいて陣を南岸に布く水流滔々として(仮設)渡るべからず斥候の報により前兵長は勇士を撰んで左岸の堤により之を砲聲せしむ敵たやすく退かず江波激して天を打ち日光暗黒風むせぶ金鱗姿をかくし兩岸の鳥共一時に悲肅す、すばやと思ふ内に敵は退却せりされども橋梁破壊して渡るを得ず乃ち中隊長は工兵隊に命じて之れを修理せしむ十五分時にして通するを得たり時に九時十分我軍整々堂々又南進す未だ幾何あからずして忽ち砲聲天をつんざく報あり曰く「敵は四十九院の北端桑園の内に屯するものゝ如し」と我軍乃ち路傍の松樹によりて之を砲撃す敵應戦し殺傷相當る殊に我軍は不利の地形にありしかば損傷頗る多かりしも上下はよく力戦して敵兵を撃退し進んで愛知郡に入り宇曾川に着す川は甚だ濶からずと云へども流水九曲する所瀬伏しの岩高

くたやすく渡るべしとも見えず敵は如何思ひけむこの險を捨てゝ南走せり然れ共橋既に落ちて渡りがたし工兵は十分餘にして船橋をかけ(仮設)我軍進軍を續く。

かくて愛川村の北端に到着せる時斥候走り來り常あらぬ良色にて「敵は全軍愛知川の左岸に陣を布き其勢容易からず」といひもはてす再び偵察にと進みぬひそかに河岸の柳に身をかくして窺えば川の南岸に沿ふて東西數百米竹林松樹の間軍馬滿ちて川の左岸の田圃皆敵する所軍容堂々死守を期するものゝ如し我上下益奮躍直ちに全軍を川の右岸橋梁の東西に戦利を布き中隊長は滴たる汗をぬぐひ暇もあく東にかけり西に走せ二軍を指揮す其狀昔の宇治川の戦もかくやあらむと見えたりけり、一齊射撃の音凄まじく或は千雷の落ちたる如く或は百雷の閃めけるが如し坤軸正にくだけむとし砲煙は上りて劫火を想像せしむ腥風頻りに吹きて殺氣鼻をつくやがて敵は突貫を始め今日の數敗を爰に雪がむとし我軍之に應じて將

に敵を盡殺せんとす、勇氣の精集る所関の聲は天地

に轟き、まさに流血の玄黄を見んとするや、休戦喇叭一聲高らかに清く響き渡りて修羅道の夢を醒まし涼風徐るに征衣をうちこゝに戦雲をさまりぬ、時に午前十一時三十分。

一同は川堤の傍ある宮にて晝食し、ばしいこひて零時五十分再び整列して中仙道を北に愛知川停車場に至り著しぬ、更に装を正して歩武齊々歸校の途につく、赤帝は赫々として光輝を武士の額にあげ、金龜城濠岸老松響を發して慨然戰勝軍の凱旋門に入るが如し。

三時五分校庭に整列し池田福永両光生より講評ありたり、要に曰く

- 一、一般命令を確守せしは可あり。
- 一、道路行進の際列を亂さず靜肅ありしは大に可あり。
- 一、斥候が道路の中央を歩みしは不可あり、注意すべし。

と右終りて解散せり。

◎本校第二撰手對佛教中學第二撰手野球試合 さきに六月七日本校庭に優劣を爭ひたる我第二撰手は六月二十日を卜し、私立第三佛教中學第二撰手と再び野球試合をあせり。當日曇天ありしが觀客非常に多く、午后一時より始まりて決戦九回、始めの程は何れも花々しく戦ひしが、終りに至り佛教中學撰手の勢頓に挫け、終に我が大勝に歸す。左に我撰手の名を記し以て其勞を謝す。

村山村居方川本房橋
木横木中日西寺華大
P C S S B B R E C F L F
1 2 3 R E C F L F

◎或一部の投稿者に告ぐ 近來怪しき風聞をあすものあり。曰く或一部の本誌投稿の中には、其道に於ける先輩に懇願して、己が力量にても到底及ばざる佳文を乞ひ受け、之を我物顔に投書して以て萬衆の賞賛喝采を博せむとする者ありと、嘗て或る一人の破廉耻漢ありて、他書中より全然剽竊した

るの文を投じて、我崇廣文壇を汚せし事ありしが、爾來我等同人は、再び此の如き、破德の行爲をからむ事を祈りたりしに、今度更にかゝる思まはしき風聞を耳にせるこそ悲しけれ。素より後進未熟の徒が先輩に依頼して、其作物の是非校正を乞ふは、有り得べき、否當然の事毫も異しむに足らざれども、しかも聊か意氣を存するものは、其れすら猶快よからずとあすに況んや、全然他人の作物を借用して、以て一時の聲譽を博せむと欲するが如きは、名こそ異かれ、事實剽竊と何の撰む所ぞ。事は素より一小部分に關する事且唯風聞に留まる事あれば、かく追窮するは杞憂の如くあれども、かゝる風聞の假にも吾人會員の耳に入るは豈崇廣文壇の名譽をらんや。予が聞き得たる諸子に於ては、決してかゝる不徳の振舞かからむ事を信する也。浮説の虚聞からむ事を祈るもの也。諸子願はくは將來斷じてさる嫌疑の起り能はざらしむるに勉められよ、火元なくして烟揚らざるの理、吾人をしてかゝる言をあさしむるもの、

諸子に於ても亦些の罪をしとせざるあり矣。

會告

◎崇廣會役員姓名

會長	西村謙三
副會長	草場季彦
誌部	小川廉三郎
部長	杉浦孝本
副部長	伊藤榮三郎
同	杉浦益雄
同	樋口逢三
同	橋本久一
同	中村祐寛
同	藤谷三磨
同	白井敬二郎
同	野村佐一郎
同	中川醇
同	外村孝造

演説討論部

部長

理事

同

陸上運動部

部長

副部長

同

理事

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

平川常太

廣瀬淵龍

花房季磨

三上哲岩

平瀬作五郎

水野透

福永作十郎

珠玖退藏

遠見與之助

大日方正隆

木村喜二郎

淺野治三郎

大橋利三

西村正一

川南貞二

大東顯吉

水上運動部

部長

副部長

同

理事

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

小出廣太郎

曾田忠太

東島清次

竹内賢吉

中川作平

北川九一郎

村上義一

前川利七

北川久一

西村文郎

林真造

加藤正廣

石川耐介

居川市二

藤林安治郎

小林喜與治

西村源彌

樋口龍観

同 大上郡彦根町字五番町
同 愛知郡秦川村大字竹原谷
同 滋賀縣敦賀郡敦賀町字川崎
同 滋賀縣甲賀郡柏木村大字泉
同 神崎郡南五箇莊村大字金堂
同 東淺井郡竹生村大字益田
同 大上郡彦根町字橋二丁目
同 蒲生郡南比郡佐村大字迫
同 神崎郡南五箇莊村大字川道
同 東淺井郡大郷村大字川道
同 阪田郡柏原村大字柏原
同 大上郡千本村大字野田山
同 福井縣丹生郡白山村大字中野
同 滋賀縣犬上郡東甲良村字長寺
同 伊香郡木之本村字木之本
同 東淺井郡東草野村字下板並
同 大上郡高宮村
同 兵庫縣姫路市字坊主町
同 東京府東京市本所區林町三丁目
同 滋賀縣阪田郡島居本村大字小野
同 大上郡彦根町字橋十二丁目
同 阪田郡西黒田村字園原
同 愛知郡秦川村大字北蚊野
同 阪田郡島居村大字三吉
同 福井縣敦賀郡敦賀町敦賀富貴

飯川淺吉
小林善彌
桃井治三郎
林 峯 吉
外村鐵三郎
前川 貢 三
長谷川 祐
岡田丈五郎
京極博仁
香水作治郎
松浦久雄
梨本與三
藤本育壽
山本文六
文室重敏
長谷豐三郎
馬場義一郎
松原保彌
浦部良太郎
小野捨藏
佐藤謹一
北條智勇
北村捨治郎
吉田 豊
稻垣宗治郎

滋賀縣愛知郡葉枝見村普光寺
同 東淺井郡竹生村大字上八木
同 阪田郡秦照村大字藤川
同 神崎郡八日市町字八日市
同 大上郡彦根町字下魚屋
同 蒲生郡中野村大字中野
同 愛知郡八木莊村字島川
同 阪田郡東黒田村字堂谷
同 滋賀縣膳所町字錦
同 大上郡高宮村
同 愛知郡豊橋村大字長
同 東淺井郡下草野村西主計
同 愛知縣中島郡長井谷村須ヶ谷
同 滋賀縣蒲生郡日野町大字村井
同 福井縣敦賀郡粟野村字市野々
同 滋賀縣愛知郡秦川村大字東出
同 廣島縣廣島市字段原
同 滋賀縣阪田郡東黒田村字本郷
同 大上郡彦根町字本
同 神崎郡八日市字金屋
同 阪田郡入江村字梅原
同 大上郡彦根町字芹新
同 山形縣米澤市福田
同 滋賀縣犬上郡豊郷村字八町
同 蒲生郡中野村字中野

河合兼次郎
岩崎春道
林 外四郎
廣島與惣松
前川繁治郎
小島寅治郎
西村耕造
谷口吳朗
阪田勘治
馬場宗一
伊藤 謙
堀江作藏
山田武治
正野玄治郎
宮本 與
中村忠太郎
大井 洋
高畑淺次郎
折笠虎雄
住井龜太郎
和氣喜策
目加田捨三
山下欽哉
西山卯三郎
村田 眞藏

同 甲賀郡水口村字永口
同 東淺井郡小谷村字河毛
同 大上郡青波村字後三條
同 東淺井郡連水村字連水
同 坂田郡東黒田村字志賀谷
同 同郡長村字岩腰
同 同郡龍井村字龍井
同 神崎郡南五箇莊村字川並
同 大上郡彦根町字芹橋八丁目
同 同郡松原村
同 同郡河瀬村字西葛龍町
同 同郡芹谷村字水谷
同 神崎郡南五ヶ庄村字金堂
同 東淺井郡朝日村字延勝寺
同 大上郡豊郷村字八町
同 愛知郡愛知川村字市
同 大上郡彦根町字五番
同 同郡蒲生村字野瀬
同 東淺井郡竹生村字稻葉
同 神崎郡建部村字堺
同 大上郡彦根町大字芹橋十四丁目
同 同郡同町大字本
同 福井縣遠敷郡小濱町字淺間
同 滋賀縣坂田郡神照村大字國友
同 同郡西黒田村大字本庄

岡田憲吉
河瀬純三
朝比奈恭爾
野々山玄朝
井關平藏
明石順三
江龍一彦
塚本文治郎
奥居重能
中川外次郎
澤村彌二郎
門川與惣吉
那須正人
井口哲宗
青山太郎
青木恭次郎
小田切直行
尾田隆明
今井長一
福長善太郎
川瀬利行
赤田壽三郎
山本光之
廣瀬捨三
宮尾秀道

同 大上郡彦根町大字川原
同 同郡福滿村大字西今
同 同郡彦根町大字東榮
同 同郡同町大字下片原
同 伊香郡北富長村大字雨森
同 大上郡彦根町大字東榮町
同 同郡同町大字川原
同 東京市京橋區築地二丁目
同 滋賀縣大上郡彦根町芹橋八丁目
同 神崎郡北五箇莊村大字宮庄
同 坂田郡島井本村大字島井本
同 愛知郡東押立村大字平松

◎端艇競漕會(明治三十六年五月一日)寄附金員物品

長崎 尚次郎君
廣田 七次郎君
川瀬 竹次郎君
森 居三二君
高橋 洋服店君
眞塚 外吉君
廣田 吉三郎君
區 彦根町長君
區 會政長君
水野 政介君
桂田 興徳次君

一金六拾錢

杉本哲三君

◎寄贈雜誌

廣野織藏君
小堀留治君
花木英四郎君
小林正策君

◎第十七學年度卒業生寄附金

澤村專太郎君	一金六拾錢
那須開神君	一金六拾錢
澁谷退三君	一金六拾錢
室谷喬三君	一金六拾錢
岡田彌橘君	一金六拾錢
吉居留松君	一金六拾錢
田中藤六郎君	一金六拾錢
廣瀬文豪君	一金六拾錢
周防正季君	一金六拾錢
草川靜治郎君	一金六拾錢
玉樹顯曜君	一金六拾錢
中島達也君	一金六拾錢
河邊七太郎君	一金六拾錢
花水榮三君	一金六拾錢
加來俊一君	一金六拾錢
中野爲藏君	一金六拾錢
柴田善作君	一金六拾錢
門根米治郎君	一金六拾錢
吉田新七郎君	一金六拾錢
大曾根行一君	一金六拾錢

學友會報第十九、廿一、廿二號
尚志會雜誌第五十三、五十四號

京華校友會雜誌第十四號

校友會雜誌第一號

學友會雜誌第七號

華陽 第三十二號

鶴城 第九號

矯々會 第八十三號

海原 第三號

校友會雜誌第一百二十六號

一橋會雜誌 第一號

龍南會雜誌 第九十七、八、九號

樹心會雜誌 第四號

渦の音 第五號

校友會雜誌 第十九號

鑛城文庫 第十三號

山口高等學校學友會

第二高等學校尚志會

京華校友會

愛知縣立第三中學校友會

札幌中學校學友會

岐阜縣立岐阜中學校華陽會

岡山縣立津山中學校濟美會

福岡縣中學明善校矯々會

海城學校日比谷中學校學友會

第一高等學校友會

東京高等商業學校一橋會

第五高等學校龍南會

眞宗京都中學樹心會

德嶋中學同志會

三重縣立第一中學校友會

大垣中學學生會



投稿規則

一、投稿ハ學術ノ範圍内ニ限リ決シテ政治的時事論ニ涉ルベカラス

一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ平假名ヲ用フベシ

一、投稿ニハ各自句讀ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スコトヲ禁ズ

一、投稿ニハ其篇ヲ異ニスル毎ニ必ズ用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ

姓名ヲ明記スベシ

一、投稿ハ其長短ヲ問ハズ全篇完備セルモノタルベシ

一、投稿ハ掲否ニ係ラズ總テ之ヲ返戻セズ

一、投稿ノ締切期限ハ其都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

明治廿七年五月卅日內務省許可
明治三十六年七月二十日印刷
明治三十六年七月廿一日發行
(非賣品)

滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷
編輯兼發行人 木川雅太郎

印刷人 安田豊八
岐阜市笹土居町四十五番戶

印刷所 安田印刷工場
岐阜市笹土居町四十五番戶

發行所 滋賀縣立 崇廣會
第一中學校